

21世紀におけるレーザー学会の発展に向けて

後藤 俊夫*

For More Developments of the Laser Society of Japan in the 21st Century

Toshio GOTO*

いよいよ21世紀を迎え、レーザー学会も更なる発展を目指して、努力を重ねていかななくてはなりません。しかし、日本全体が大きな転換期にさしかかっているなかで、学会を取り巻く状況も激しく変わりつつあり、それらを十分考慮して、レーザー学会の発展の方向を考えていく必要があります。

学会を取り巻く状況のなかで、レーザー分野の専門学会であるレーザー学会にも大きな影響を与えるいくつかの外部的要因は、日本の産業構造の変化、若年研究者・技術者の減少、論文誌等の電子化、日本技術者教育認定制度(JABEE)の動き等ではないかと思えます。日本の産業構造は、少品種大量生産から多品種少量生産へ、改良型技術から先端的・創造的技術へ、ハードウェア技術からソフトウェア技術へ、比重が移ってきています。レーザー学会が包含する分野は、多くが先端的分野であり、そういう点では、自助努力によって、今後も新しい産業構造に対応した活動を行っていくことができると思えます。ただ、ソフトウェア産業へのシフトが進むと、新しい会員確保という点では難しい問題がでてくるかもしれません。

18歳人口の減少とともに、多くの分野で若年層の数は減少していきませんが、近年の理科離れ・物理離れ現象から見ると、物理系学会の若年研究者・技術者の会員数は、今後かなり減少する可能性があります。新しい会員の確保が難しくなり、レーザー分野の研究の進展にも影響がでてくることもありえます。これに対応するのは極めて難しいことですが、レーザー学会の魅力あるいは総合的レベルをさらに高め、若い人達を引きつけることができるように、粘り強く努力を続けていくべきであると思えます。

上の二つに比べると、やや限定的な問題ですが、より近い将来レーザー学会に直接的に影響を与えるかもしれない問題は、世界的に急速に広がっている論文誌の電子化の流れです。日本では、昨年からは応用物理学会と日本物理学会が協力して、物理系学術誌刊行協会(IPAP)を設立し、英文論文誌Japanese Journal of Applied PhysicsとJournal of Physical Society of Japanの電子化を進めています。IPAPは、態勢が整えば、将来、物理系のいろいろな英文論文誌の出版も手がける可能性がありますから、その動きには十分注意を払っておく必要があると思えます。

アメリカのABETに対応して、会員が1万人を超える理工系の総合学会や日本工学教育協会が幹事学協会となって作られた日本技術者教育認定制度(JABEE)では、現在大学の技術者教育カリキュラムの認定に関する検討を集中的に行っています。応用物理学会も幹事学会としてJABEEに加わることになり、学会内部でも議論を重ねています。会員が数千人規模の分野別専門学会は、幹事学会を通して、JABEEの活動に関与することになると思えます。レーザー学会は、応用物理学会が幹事学会として呼びかけたJABEE連絡協議会に加わっていますので、そこを通してJABEEに関与することになります。JABEEが日本の中で大学の技術教育カリキュラムの認定に関わるようになった場合は、学会が委員を派遣するなど、重要な役割を担うこととなりますので、レーザー学会も一定の役割を果たすことを考えておくべきであると思えます。

上述したように、レーザー学会が、21世紀においても引き続き発展していくためには、学会内だけでなく、広く学会外の動向にも目を向け、他の組織とも協力して活動していくことが今まで以上に重要になってきていると思えます。

元来、学会は同好会的な研究者有志の集まりという色彩が強く、社会もそれを認めてきましたが、最近、特に大きな学会に対しては、社会的な貢献が求められるようになってきました。学会にとってはやや窮屈に感じられる面があるかもしれませんが、別の見方をすれば、それだけ社会から期待されているとも言えますので、このような状況を前向きに捉えて活動を広げていくべきであると思えます。

レーザー学会の今後のますますの発展を祈念しています。

* 名古屋大学 工学研究科量子工学専攻 (〒464-8603 愛知県名古屋市千種区不老町)

* Department of Quantum Engineering, Graduate School of Engineering, Nagoya University, Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya, Aichi 464-8603